

1999年12月発行「シ研草創期の思い出」(p.94)の原稿(p.70~71)

気がつけば、大学教授

中所 武司
明治大学工学部情報科学科 教授

「三十を過ぎてなお、私を変えた1つの本、人、仕事、出来事の類との運命的な出会いを持たぬ物足りなさあり。後半生に期待したい」

これは、日立に入社して8年後の1979年にある同窓会で残した文章です。今から思えば、この時期はまだ先ばかり見て、自分の身の回りの運命的な出来事に気がついていなかった証でもあります。しかし、今となっては懐かしいこの70年代こそ、1971年度に情報システム研究所(事業所番号612)に同期入社した学卒男子約20名の人達すべてにそうであったように、私にとっても激動の時代であったといえます。

もちろん、それはシステム開発研究所設立に始まるのですが、私はその1年前にそのリハーサルを終えていたのです。やはりここは時間の流れにしたがって述べることにしましょう。

私の最初の仕事は(ソフト)計画部の依頼研でグラフィックサブルーティンパッケージの開発でした。1971年春に(情研)に配属になり、マンマシンユニットの榎尾次郎研究員グループの一員として、家族的な雰囲気の中でアセンブラ&16進数コアダンプと向き合う毎日を楽しく過ごさせていただきました。当時は若い人が多く、活気にあふれていましたが、その反面、日立の研究所としての文化はまだ育っていませんでした。

それに危機感を抱いた当時の毛利総務部長は、文化(技術?)の移植を意図して、既にコンパイラの専門家としてその実力を内外から認められていた(中研)の中田育男主任研究員を(情研)に迎えた、と伺った記憶があります。田上崇部長を説得されるのに苦労されたとおっしゃってました。私は、1972年2月の中田ULのオーエスユニット誕生と共に榎尾グループごと移籍しました。先ほどのべた“1年前のリハーサル”とはこのことです。そして、仕事の上では、渡辺道生研究員の下で(ソフト)言応部の依頼研で教育用FORTRANコンパイラを開発することになりました。

そして、1973年2月の(シ研)発足を迎えましたが、「プログラムはいくら作っても評価しない」という三浦武雄初代所長の言葉を気にしながらコンパイラの開発がその後1年続きました。そして、所長の指示(?)で(お)から依頼研究をもらうべく、中田UL、野木兼六研究員と共に(お)の桑原洋課長のところに出向きました。そのとき、桑原課長は4つのテーマ候補をあげましたが、その中からタスク間共通データに関する記述言語を開発するというテーマに決定しました。このテーマは、(お)側の担当者の林利弘技師、森清三企画員他のメンバに恵まれ、後に構造化プログラミング言語SPLとして長く(お)

のアプリケーション開発に利用されることになりました。

このSPLは、社内で社長賞をいただくなどの榮譽にかがやいただけではなく、私にとっては、国際学会発表2件（UJCC78, IFIP80）や情報処理学会論文2件（1979, 1980）、IEEE Trans. Software Engineeringの論文（1981）という成果をもたらしてくれました。そしてSPLで学位をいただくこともできました。当時の川崎淳副所長がよくユニットに来られて冗談交じりに「レベルの高い研究をしているか」ということを話題にされていかれましたが、70年代後半によく研究者としての自覚ができたような気がします。

今、王禅寺から車で10分くらいの明治大学生田校舎でソフトウェア工学研究室の看板を出して教授職を（転職じゃなかった）天職としていますが、今日あるはあの激動の70年代に出会った多くの人達のおかげと感謝する日々です。